

巻頭言

私が惑星科学分野に関連した実験的な研究をスタートするきっかけは長谷川先生(当時京大)が作られたGrain Formation Workshopの第2回研究会(1981年京都)に出席し、京都グループの一員に入れていただいたことに端を発しています。特に、この分野は理論、実験、観測の三つの研究が相互作用していることより、非常に多くの刺激を受けてきた一人であります。私自身も「創る、視る、調べる、比較する」を研究室の学生向けのテーマとして、この分野への関心を喚起してきました。最近では、太陽系の冥王星の話題は年齢に関係なく惑星科学に関する関心が高まると同時に、日本独自のミッションの成果が公表され、我が国の惑星研究の成果の一部が社会的に認識され、興味、関心を持つ若者がさらに増加するきっかけとなっているように感じています。私自身のような小さなグループから「惑星」を冠した講座、学科が生まれ、さらに連合構想へと結び付く原点にこの学会が重要な位置づけとなることを望んでいます。最近では、本学会と同じ規模の学会でも、パラレルセッションシステムの発表が増え、関心の話題が聞けない状況が多くなっています。この学会は、中沢先生、水谷先生の主旨が生かされていると思っていますが、1つの発表会場で、すべての分野の話題と現状が聞ける状況で、異分野の方々からのサジェッションや発表そのものが、新しい展開のきっかけとなってきたように実感しています。発表時間は短くなっても、このような形式が続くことを望んでいる一人であります。特に、この分野でハツラツと生きがいを感じて研究をスタートしている若者が、他の学会に比して多いと感じています。優秀な若者が惑星人として活躍できる環境が同時に広がることを望んでいます。

埴内千尋(立命館大学)